

【68年5月／ファッション】

女性にパンタロンを ——イヴ・サンローランと1968年

菊田 琢也

(首都大学東京・非常勤講師)

はじめに

2002年1月7日、フランスのデザイナー、イヴ・サンローラン (Yves Saint Laurent, 1936-2008) の引退会見が行われた。同月22日にボンピドゥーセンターにて発表する2002年春夏オートクチュールコレクションをもって、自身のブランドから身を引くという。そうした声明が、デザイナー自らの声で読み上げられ、世界中に報じられるのは極めて異例な出来事であった。引退会見のなかで、サンローランは次のような発言をしている。

シャネルがそうであったように、私もまた自分のデザインがコピーされることを受け入れてきたわけだが、今や、あらゆる女性がパンツスーツ (tailleurs-pantalon) やスモーキング (smoking)、Pコート (caban)、そしてトレンチコート (trench-coat) を着ていることを誇りに思っている。私は現代の女性のワードローブを作り、時代を変革する流れに参加した。私は洋服を通じてそれを実践したのだ。確かにそれは、音楽や建築、絵画といった他の芸術分野に比べたら重要ではないかもしれないが、とにかく、私はそれをやってのけた。自惚れるようだが、ファッションは女性を装飾するだけでなく、彼女たちの不安を取り払い、自信を与え、自己を受け入れることを可能にさせると、私はずっと信じてきた¹。

¹ サンローランの引退声明文については、「リベラシオン」紙2002年1月8日付の記事で全文を確認することができる。(Libération.fr: https://next.liberation.fr/culture/2002/01/08/j-ai-cotoye-les-faiseurs-de-feu-dont-parle-rimbaud_389680)

パンツスーツ、スモーキング、Pコート、トレンチコート。サンローランがここで挙げているアイテムは、今では女性たちが日常的に着用するものとして定着しているが、そのいずれもが、かつては男性が着る服であったという点をまずは確認しておきたい。つまりは、女性たちが着る服ではなかったのだ。1960年代において、軍服やスーツといった、かつては男性の衣服とされていたものを、サンローランは女性が着用できるものへとデザインし直した。なかでも、女性にパンタロン²を履かせるということを、サンローランは1960年代を通じて取り組んだ。その取り組みは、14世紀頃に確立された洋服における性差——男性はズボン、女性はスカートといった明確な区分の見直しを推し進め、ひいては、女性も男性と同様にズボンを着用する時代が訪れる一つの契機となった。

1. 1968年、もう一つの「革命」

1968年7月30日、アメリカの業界紙「Women's Wear Daily」は、「革命家イヴ (Yves, The Revolutionary)」という見出しの記事を掲載した。

パリの月曜日、もう一つの革命。イヴ・サンローランは、新しいコレクションのなかで女性たちにパンツスーツを与え、実際のところドレスを捨てさせた。彼はそれを、全くもって自覚的にやってのけた。ショーが終わるまでに、ドレスが10着以上登場したのかどうかさえ疑わしい。私は途中でメンズコレクションを見ているような気分にさえなった。もちろんそんなことはないのだが。最近、男性たちのほうが色鮮やかな格好をしている³。

同記事は、サンローランの1968年秋冬コレクションを報じたものである。従来のオートクチュールとは異なり、パンタロンを合わせたルック——装いが主体の構成に率直な驚きを感じている様子が窺える。1968年の6月、フランス議会総選挙で

² パンタロン (pantalon) とはフランス語で長ズボンの意だが、特に60年代を中心に、女性の裾幅が広い長ズボンを指す用語として使われてきた。いわゆる長ズボンを指す用語としては、今日、パンツ (pants) という呼称が一般的に使われているが、日本では下着と混同されることが多いということもあり、本稿ではパンタロンという表記を使用する。

³ *Women's Wear Daily*, 30 July 1968. p. 14.

ド・ゴール派が圧勝したことによって、68年5月の叛乱は次第に沈静化していくわけだが、そうしたなか、7月下旬に1968年秋冬オートクチュールのファッションウィークは始まった。

オートクチュール (haute couture) とは、19世紀後半のパリで興った高級注文服製造の産業システムのことで、元来は富裕層を対象としていたが、第二次世界大戦後、既製服産業が次第に隆盛していくなかで、縮小を余儀なくされた。オートクチュールを手掛けるブランドは、フランス・クチュール連盟 (Fédération nationale de la couture) に加盟することが条件付けられ⁴、春夏シーズン (1月下旬) と秋冬シーズン (7月下旬) の年2回パリで新作の発表を行う。同連盟に加盟するブランド数は1966年の時点で39ブランドであったが、翌年の1967年には17ブランドと半分以下に減少している⁵。

そうした状況を受け、1968年にド・ゴール政権はオートクチュール産業への経済支援を打ち切ることを決定し、当時のオートクチュールを牽引していたクリストバル・バレンシアガは、パリとスペインにあった店舗を閉鎖し、引退を決めた。時代の要請に従うかたちで既製服ラインを設立することよりも、身を引くことを選んだというのが主な理由だが⁶、68年5月の叛乱を受けての決断でもあったとされる。当時パリに在住し、ファッションウィークを取材していた堤邦子は、当時の様子を次のように記述している。

パリが五月革命の騒乱のさなかにあったとき、オートクチュリエたちは、それぞれ真剣に自分たちの仕事の将来を考えていた。この秋冬の作品発表は中止にするかもしれない……と、私にそう伝えてきたクチュリエも何人かいた。誰も先のことはわからなかった。

(中略) 重い沈黙と不安の期間が過ぎ、まひ状態にあったパリの人たちの暮らしが、ようやく通常に動きだし、各店のアトリエに布地が運びこまれ、縫い子

⁴ 現在のFédération de la Haute Couture et de la Mode。

⁵ デイディエ・グランバック『モードの物語——パリ・ブランドはいかにして創られたか』古賀令子監修、井伊あかり訳、文化出版局、2013年、p. 252。

⁶ Lesley Ellis Miller, *Balenciaga : Shaping Fashion*, V & A Publishing, 2007, p. 104.

たちもアトリエに集まってきたと伝えられた。オートクチュールの大御所、バルンシアガの引退に続いて、カステイヨもまた……と発表されたのは、それから間もなくである。

エレガンスについて、独自の見識を持ち、オートクチュールの中でも最も貴族的なお客を持ったこのふたりの引退は、ファッション関係者には驚きもなく、予期されたこととして受け止められた。オートクチュールが作品を民主化しないかぎり、そのエレガンスは消えていく以外に生きるみちがない……ということ、多くの人々に意識させたと思う⁷。

ウォーラーステインは、1968年という時代を「世界システムの内容と本質にかかわる革命」と見なしているが⁸、ファッションの分野で言うならば、既製服製造という産業システムに決定的に書き換えられていく時代であった。フランスのオートクチュールブランドの多くは、一部の富裕層を顧客とした注文服製造のみでは経営が成り立たなくなり、オートクチュールのデザインを簡略化し、日常的に着やすくした量産ライン——プレタポルテ (prêt-à-porter) と呼ばれる既製服ラインを新たに設けるなどの対応が図られた。いわゆるファッションの「民主化」が叫ばれた時代である。

2. 新しい時代の旗手としてのサンローラン

1968年秋冬シーズンは、そうした状況下で幕を開けた。「サンローランの新しいスタイルは、批評家たちがかつてサック (sack) と呼んだバルンシアガのドレス以来の、最も重要な進展である。それはとても若々しいものであったので、良くも悪くもほとんどの女性たちが着たいと思うだろう。それぐらい特別なファッションだ」と、「Women's Wear Daily」はサンローランの新作を報じた⁹。ここで言う「新

⁷ 『ハイファッション』1968年秋の号、文化出版局、p. 111。なお、ここで「バルンシアガ」と表記されているものは、クリストバル・バルンシアガを、「カステイヨ」はアントニオ・カステイヨのことである。

⁸ イマニュエル・ウォーラーステイン編『転移する時代』丸山勝記、藤原書店、1999年、p. 114。

⁹ *Women's Wear Daily*, 30 July 1968. p. 14.

しいスタイル」とは、もちろんパンツスーツのことである。

1957年にバレンシアガが発表した、まるで布袋 (sack) を被ったようなシルエットのチュニックドレス——それは、女性の曲線的な身体ラインを強調する当時のドレスの流行とは異なり、ゆったりと覆い隠すようなものであったを引き合いに出し、サンローランのパンツスーツがいかに画期的であったのか、大げさに言えばいかに「革命」的であったのかを説明する。そこには、低迷するオートクチュール産業を再び活性化させるための話題づくりという意図があったことは想像に容易い。「サンローランはオートクチュールの伝統を破ったが、だからといって全ての人が彼の仕事を喜ぶわけではない。とはいえ、彼がオートクチュールの新しい方向性を示したことは確かだ」と同記事は付け加えている¹⁰。

ファッション写真家兼ジャーナリストで知られるメアリー・ラッセルもまた、バレンシアガを引き合いに出した報告を寄せている。「サンローランのパンツスーツとバレンシアガのサックドレスを比較することは可能だが、そこには大きな違いが一つある。サンローランはあらゆる世代に向けて語りかけているのだ。彼は、若者の力によって支えられている。バレンシアガはモードにおける最後の独裁者だった。他方、サンローランは広範囲に新しい波 (New Wave) を起こす預言者である」¹¹。

バレンシアガを旧来的なオートクチュールの象徴と見なし、他方、サンローランを新しい時代の旗手と位置付けるこれらの報告からは、1968年という時代が一つの転換期になり得るだろうという当事者たちの予感を窺い知ることができよう。事実、ファッション史において、1968年とは体制的な転換の時代として、あるいは世代的な転換の時代として認識される。例えば、日本のデザイナー・三宅一生は、パリで68年5月の叛乱を目撃し、「限られたお金持ちに向けた服ではない。ジーンズやTシャツのように多くの人に身近で、洗えて、使いやすいもの」を作るという考えに至ったと述懐している¹²。

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ *Ibid.*, p. 4.

¹² 「初めて語る被爆体験——デザイナー三宅一生の生き方」、「読売新聞」2015年12月15日。
(<https://www.yomiuri.co.jp/feature/sengo70/20151214-OYT8T50111.html>)

アリス・ローソーンが著した伝記を読むと、サンローランはこのコレクションを「1968年の「五月革命」で機動隊とぶつかったフランスの学生たちに捧げた」という記述が見られる¹³。同様な証言として、アクセル・マドセンによるもう一つの伝記には、「ニューヨーク・タイムズ」のバーナディン・モリスが当時行なったインタビューに対するサンローランの回答が掲載されている。「68年5月の運動でバリケードを張っていた青年男女は実際に美しいから、美しく見えたのだ。モードとは、皆が考えているように、オートクチュールのことではない。社会で起こる事件のほうが重要なのだ」¹⁴。実際の真意は定かではないが、サンローランがファッションの「民主化」という時代の要請に自覚的であったことは間違いない。

3. サンローランとパンタロン

イヴ・サンローランというブランドが創設されたのは、1961年12月のことである。その後のサンローランの仕事を振り返ってみると、彼にとって1960年代は、女性のパンツスタイルを普及させることに情熱を注いだ時代であったと言うこともできよう。この時期、サンローランは女性に向けて、パンタロンを繰り返し提案している。

1962年春夏コレクション——それはサンローランブランドの最初のコレクションだが、その冒頭に登場したのはPコート（premier caban）にパンタロンを合わせたスタイルであった。「男性の衣服を借用することで、女性たちに寛ぎと自信を与える」¹⁵という考えから、サンローランはしばしば男性の衣服とされていた軍服やスーツ、狩猟服などを女性向けにデザインし直して提案した。1962年春夏のPコートは、そうしたデザイナーの考えをブランドの姿勢として明確に打ち出したものであったが、サンローランはそれに白のシャントンパンツとヒールのないミュールを合わせたのである。

¹³ アリス・ローソーン『イヴ・サンローラン——喝采と孤独の間で』深井晃子訳、日之出出版、2000年、p. 116。

¹⁴ アクセル・マドセン『デザインに生きる——イヴ・サンローラン』小沢瑞穂訳、文化出版局、1979年、p. 110。

¹⁵ Musée Yves Saint Laurent Paris. (<https://museeyslparis.com/en/biography/premier-caban>)

1966年秋冬の「スモーキング (le smoking)」という呼び名で知られるタキシードは¹⁶、正装における女性のパンツスタイルの提案である。男性は黒いタキシード、女性は色鮮やかなドレスが定番とされる正装の場においては、服装における明確な性差が強調される。2018年1月のゴールデングローブ賞の授賞式で、参加した女性たちの多くが黒いドレスやパンツスーツを着用していたことが話題になったが、映画業界のセクハラ撲滅を訴えるこのパフォーマンスは、#Me Too運動の流れと結びつく形で広く注目された。

19世紀後半アメリカの女性解放運動家アメリア・ブルーマーを例に挙げるまでもなく、女性の社会的地位の向上を促す運動やパフォーマンスにおいて、女性がズボンを履くという行為は、しばしば戦略的に使われてきた。サンローランのスモーキングにも同様の意味を見出すことは容易だが、実際のところ、彼は女性にパンタロンを履かせるという行為に別の意味合いを見出していたようだ。1968年3月に放送されたフランスの国営放送INAの番組インタビューのなかで、サンローランは以下のような回答をしている。

パンタロンは好きだが、しかし何かを主張するような履き方はあまり好きではない。女性が、男性と同等だと主張するために履くというのは好きになれない。むしろ、女性がパンタロンを履くことで、女性らしさが引き出される。女性らしさで男性に対抗する。女性らしさによってハンディを跳ね返すことができるのだ¹⁷。

とはいえ、サンローランのスモーキングには一着のオーダーも入らなかったという¹⁸。しかし、その数ヶ月後に開設したプレタポルテライン、イヴ・サンローランリヴ・ゴージュ (Yves Saint-Laurent Rive Gauche) において、デザインや素材を簡略化し、価格を抑えた既製服として販売すると、多くの女性が買い求めた。この

¹⁶ 「スモーキング」と呼ばれる衣服は、19世紀半ばヨーロッパの男性たちの間で一時流行した喫煙服のことで、タキシードの原型とされる。

¹⁷ フランスの国営放送INAの番組「Dim Dam Dom」が1968年3月10日に放送した「Yves Saint Laurent répond à Mademoiselle Chanel」より。

¹⁸ Catherine Örmén, *All about Yves*, Laurence King publishing, 2016, p. 49.

ことを受け、サンローランは、これからは既製の時代だという認識を確かなものにした。「私が目指すのは、同じ服をより安く作り、誰もが買え、誰もが着られるようにすることだ。これからはプレタポルテの時代だ。プレタポルテとは希望であり、新しい時代がやってくる」¹⁹。

1966年9月に開設されたイヴ・サンローラン リヴ・ゴーシュは、その名のとおり、パリのセヌ川左岸 (rive gauche) の6区、サン＝ジェルマンに近いトゥルノン通りに店舗を設けた。これは、オートクチュール・ブランドの多くがセヌ川右岸のサントノーレ通りやモンテーニュ通りに店舗を構えていたことに対し、それとは対称的な場所にあえてプレタポルテの店舗を置くことで、体制的な転換を強調付けたわけだ。

サンローランが街着 (city wear) としてのパンツスーツを初めて提案したのは、1967年春夏コレクションにおいてである。「サンローランのパンツスーツを見たら、アメリカの女性たちは自分が持っている全ての服を燃やすことだろう。紳士服の素材を用いたサンローランの新しい幅広のスーツは、今シーズンのパリにおいてセンセーショナルだ」と、「Women's Wear Daily」は報じている²⁰。スモーキングを発表してから、実に1年後のことであった。そして1968年の7月、パンツスーツが大々的に打ち出されることになる。

4. 1968年、シティパンツの流行

「Women's Wear Daily」は、1968年に発表されたサンローランのパンツスーツを「シティパンツ (City Pants)」と名付けた。同紙によると、シティパンツとは「乗馬用や狩猟用パンツではなく、カントリー・パンツや散歩用のパンツでもない。レストランで食事をするときにも、おしゃれな通りでショッピングを楽しむときにも、それからオフィスにいるときでさえも着られるパンツ」²¹のことであり、ある程度の身だしなみが要求されるような、例えば職場であつたりレストランであつたりにおいて、女性たちが着用できるパンツスタイルとして提案されている点が強調さ

¹⁹ 前出のINAの番組「Dim Dam Dom」でのインタビューより。

²⁰ *Women's Wear Daily*, 31 January 1967.

²¹ *Women's Wear Daily*, 29 July 1968, p. 1.

れている。

この当時はまだ、女性たちが職場やレストランでパンタロンを履くことが相応しくないと思われていた時代である。1967年のイギリスの風刺週刊誌「パンチ」に掲載された風刺画——パンツスーツを着た女性客の来店を拒むレストランの様子を描いたものには、そうした時代状況が表れている。「あの客がパンツを履いた女性でも、あるいはネクタイを締めていない男性でも、決まりは決まりだから、入店をお断りしなければならない」²²。とりわけ、職場において女性が、男性と同じように、パンタロンを履いて仕事をするには制限され、それは女性の職業選択や役職就任の困難さと結びついていた。

そうした社会状況のなか、1968年7月に発表されたサンローランのパンツスーツは、オートクチュールの活性化を目論む話題づくりとしてだけではなく、社会における女性の服装改善への一手として大きな期待が寄せられたのである。そうした期待も込めて、「サンローランのシティパンツが街中を闊歩するだろう」、「革命が起こった。スカートはもはや必要ない」と²³、「Women's Wear Daily」が幾分大げさに報じた気持ちも理解できよう。しかしながら実際のところ、早い段階でそれは実現することになる。

パンタロンはパリのためにある。カフェ・ド・フロールでの朝食からル・ルレ・プラザでの昼食、それから大抵のレストランのディナーでさえも、はたまた、シェ・カステルやシェ・レジーナで夜のお酒を楽しむときにも、パンタロンで行こう。(中略) サンローランは若い世代について理解している。この都市の女の子たちの間で流行っているものこそ、パンタロンなのだ。それはサンローランのように、腰から真っ直ぐにストンと落ちた幅広のシックなパンタロンである²⁴。

ニューヨークにある有名レストランのいくつかから強い非難を浴びているシ

²² *Punch*, 1 February 1967.

²³ *Women's Wear Daily*, 26 July 1968. p. 1.

²⁴ *Women's Wear Daily*, 8 August 1968. p. 5.

ティパンツ革命だが、全国の校則の厳しい、あるいはそうではない女子大いずれにおいても、大したさざ波が立つことなく受け入れられている。(中略)最近、ほとんどの大学では、勉強に専念している学生の妨げにならない限り、構内でのミニスカートやパンタロンをわざわざ注意したりしないようだ²⁵。

ロンドン……おしゃれな女の子たちはみんなパンタロンを履いている。彼女たちはルールに捉われない。ルールを壊し、自分たちで新しいルールを作る。現時点で最もおしゃれなルール。それは、服を着ないといけない場所なら、あなたはどこでもシティパンツを履くことができるというもの。サンローランは、様々なチュニックやコートに最新のシティパンツを合わせる方法を教えてくれた²⁶。

世界各都市のスナップ写真と合わせて掲載されるそれらの文面からは、とりわけ若い世代の女性たちを中心に、パンタロンがある程度の割合で社会に普及している様子を窺い知ることができよう。

おわりに

もちろん、サンローランが提案するまで、女性たちがパンタロンを着用していなかったというわけではない。例えば、ジャン＝リュック・ゴダールの映画『勝手にしやがれ』(1960年)において、ジーン・セバーグ演じるパトリシアは、七分丈のパンタロンを着用しているし、『中国女』(1967年)においても、アンヌ・ヴィアゼムスキーほか、革命ごっこに興じる女学生たちは、劇中に登場するその他の女性たちとは違い、パンタロンを着用している。セバーグのカジュアルなパンタロンは「ペダルプッシャー (pedal pusher)」と呼ばれ流行し、ヴィアゼムスキーが履いていたようなパンタロンは、彼女たちが着る人民服風のシャツやキャスケット帽などもそうだが、男性と同等であることを主張する服装として、68年5月の際にも女性たちが着用していた。しかし、これらはカジュアルな服装が許される場でのことであり、例えば職場やレストランにおけるパンタロンの着用は、実際のところ、1968

²⁵ *Women's Wear Daily*, 4 September 1968, p. 1.

²⁶ *Women's Wear Daily*, 3 September 1968, p. 5.

年以降にならないと普及しないのである。

1968年9月の「フランス版ヴォーグ」には、6種類のサンローランのパンタロンが、6ページの紙幅を使って大きく紹介されている。そこには、サンローランの以下のような言葉が寄せられている。「私は、男性のジャケットに匹敵するような、女性の定番としてのパンタロンを作りたい」²⁷。

参考文献

- Axel Madsen, *Living for design : The Yves Saint Laurent Story*, Delacorte Press, 1979. アクセル・マドセン『デザインに生きる——イヴ・サンローラン』小沢瑞穂訳、文化出版局、1979年。
- Alice Rawsthorn, *Yves Saint Laurent : A Biography*, Nan A. Talese, 1996. アリス・ローソン『イヴ・サンローラン——喝采と孤独の間で』深井晃子訳、日之出出版、2000年。
- Terence K. Hopkins and Immanuel Wallerstein (eds.), *The age of transition : trajectory of the world-system, 1945-2025*, Zed Books, 1996. イマニュエル・ウォーラーステイン編『転移する時代——世界システムの軌道 1945-2025』丸山勝訳、藤原書店、1999年。
- Didier Grumbach, *Histoires de la mode*, Seuil, 1993. デイディエ・グランバック『モードの物語——パリ・ブランドはいかにして創られたか』古賀令子監修、井伊あかり訳、文化出版局、2013年。
- Laurent Joffrin, *Mai 68 : une histoire du mouvement*, Seuil, 1988. ローラン・ジョフラン『68年5月』コリン・コバヤシ訳、インスクリプト、2015年。
- 成実弘至「ミニスカート神話——若者の身体とファッション」、富永茂樹編『転回点を求めて——一九六〇年代の研究』、世界思想社、2009年。
- Catherine Örmén, *All about Yves*, Laurence King publishing, 2016.
- Colleen Hill (eds), *Paris Refashioned, 1957-1968*, Yale University Press, 2017.
- Gilles Lipovetsky, *The Empire of Fashion : Dressing Modern Democracy*, Princeton University Press, 1994.
- Lesley Ellis Miller, *Balenciaga : Shaping Fashion*, V & A Publishing, 2007.
- Olivier Saillard and Anne Zazzo (eds), *Paris Haute Couture*, Flammarion, 2013.

²⁷ *Vogue Paris*, septembre 1968, pp. 214-219.